

こんにちは！ 室長の工藤です。

みなさんは県庁の敷地内東側にある「御仮屋跡」の碑をご存知でしょうか。出入口の近くにひっそりとあるので、一般にはあまり知られていないようです。また、仮に目にしたとしても「御仮屋」…はて、それは何だい？という具合で、記憶に残らないかもしれません。



「御仮屋跡」の碑

御仮屋とは、一言でいうと藩政時代に藩主（お殿様）が外出の際に宿泊所として使った施設です。青森の他にも深浦や鯨ヶ沢などに御仮屋があり、町奉行所が御仮屋も兼ねるような形で設置されていたようです。一方、青森の場合は町奉行所から離れた位置に設置され、規模も南北120メートル余、東西も130メートルほどはありそうな大きな施設です。そして、ここが明治4年（1871）の青森県の誕生とともに県庁となったのです。

さて、青森の御仮屋は寛文11年（1671）に弘前藩によって建設され、当初は御仮屋ではなく、「青森御屋敷」と呼ばれていました。また、青森の町づくり自体はすでに45年ほど前から始まっており、御仮屋の完成でもって藩政時代の青森町の姿ができあがりました。ただ、このような大規模な施設を町づくりの当初から計画していたかといえ、どうやらそうではなさそうなのです。

御仮屋建設の理由は、しばしば「南部氏に対抗するための出城」として語られるようですが、御仮屋は弘前藩が盛岡藩とともに担った「北ほくてき狄の押さえ」、すなわち北方社会に目を向けた施設だとみられます。というのは、2年前の寛文9年に蝦夷島でシャクシャインが反松前藩の決起を各地のアイヌ集団にうながし、大規模なアイヌ民族の蜂起が勃発しました。そこで、弘前藩は派兵することになったのです。ほうき蜂起の鎮圧後、青森は松前・蝦夷地への渡航地として重要視され、ここに御仮屋（青森御屋敷）が建設されたと考えられているのです。



シャクシャイン像
(新ひだか町・真歌公園内)

つまり、青森は湊町としての経済的な側面ばかりではなく、弘前藩の「北狄の押さえ」を具現化するともいっていい御仮屋を擁することで、北方社会に向けた政治的・軍事的な役割をも付与された都市として位置づけられることになったのです。その後こうした機能は縮小され、もっぱら藩主の宿泊所として利用されることとなります。ところが、明治元年（1868）からの箱館戦争を契機に、再び御仮屋の役割が注目されることになるのです。その意味で、青森御仮屋は政治・行政的な側面が強いものの、藩政時代以来の青森と北海道を結ぶ象徴的なレガシーであるといっていでしょう。